

リチャードの死とボリングブルックへの王権推移の意味
『リチャード二世』における解消される二面性

はじめに

国のトップが政策を過ったり、あるいは横暴さにより職権を乱用したりすると、それに従う民衆には不満がつのっていく。そしてその不満が最大になった時には、国のトップの交代という事態が生じるものである。現代においてはクーデターによる国のトップの交代は起こりえないものなのかもしれないが、クーデターによる国のトップ、国王の交代は歴史が何度も証明している事である。

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『リチャード二世』 (*Richard II*, 1595)¹ はまさにこのクーデターを取り上げた歴史劇であり、国王リチャード (Richard) の失墜の原因には様々な見解が示されている。作品タイトルにもなっている主人公リチャードに注目が集まるのも当然の事であろう。ポール・ブードラ (Paul Budra) は、シェイクスピア時代に流行した歴史的な目的論に言及して、リチャードを失墜させる理由を劇作における流行の型にのっとったものとしている。ブードラは「シェイクスピアがリチャードに『悲劇』を呼び起こさせる時、彼は歴史の過程における流行のコンセプトに関わっている事になる。つまり全ての王は悲劇的に死ぬ。リチャードも然り。悲劇の転移が歴史を支配し、リチャードの物語はこの目的論の一つの証明である」 (“ When Shakespeare has Richard invoke “ sad stories, ” then, he is tapping a popular concept of the process of history: all kings die tragically; Richard will too. A tragic metabasis dominates history; Richard’s story is one more proof of this teleology. ”)(6)と説明している。

そしてドロシア・ケーラー (Dorothea Kehler) はリチャードからボリングブルック (Bolingbroke) への王権の移動を考える際に、リチャードに対して好意的な見方を示している。つまり命を失ったリチャードを憐れみ、「言葉なく、リチャードは自らの転倒によっ

て棺は王冠と同じと言っているのだ。つまり征服者は征服されるものになるに違いないと彼に言っている。新しい王は自分の手から血を洗い流したいと思っているが、彼は肉体と血の脆さを洗い流す事は出来ない」(“ Wordlessly, Richard tells him that the coffin, like the crown, is in reversion his, that the conqueror must join the conquered. The new king may hope to wash the blood off his hands, but he cannot wash off the fragility of flesh and blood ”)(17)としている。

これらの劇作の流行やリチャードへの好意的な見方に対して、リチャードの罪に対する罰としての王権喪失を述べているのは、ジョン・ハルバーソン(John Halverson)であり、「彼による王は絶対正しいという確信が、悪行であるという考えを心に抱く事すら不可能にし、まして理解や受け入れることなど出来ないのである」(“ His conviction of royal infallibility makes it impossible for him even to entertain the idea of wrongdoing, let alone understand or accept it ”)(351)とリチャード失墜は当然の報いであると述べている。

またリチャード失墜の原因を、悪行を行うという以前に、彼の性格であるとしている批評家には、ニーマ・パービニ(Neema Parvini)がいる。パービニは「王は物事を筋道通りに動かすことができない。なぜなら彼は権力とは、型と言葉にもっぱら依存するものであると考えているからである」(“ The king cannot afford to let action dictate the course of events, because he knows his power depends exclusively on form and language ”)(186)としている。

私は王失墜の原因には彼自身が抱える矛盾があり、それゆえ劇作の流行や死への好意的な見方よりは、罰としての死という考え方を支持する。やはりリチャード自身に問題があるからクーデターを招くのである。特にパービニの考えに注目するならば、この作品の序盤のモーブレイ(Mowbray)とボリングブルックの決闘に

よる争いごとの解決に一度は賛成しながらも、「我々王は懇願するためでなく、命令するために生まれた」(“ We were not born to sue, but to command ”)(1.1.196)という考えにのっとり、急に決闘を止めさせ、しかもボリングブルックへの10年の追放の罰をその場の感情によって6年に縮めてしまう事などは、王の恣意的な言葉による権力乱用の証拠として十分と考えられるのである。序盤からリチャードには気まぐれともとれる、態度の矛盾が見受けられるのである。

本稿では王権を失い命を落とすリチャードの死の意味を考えてみたいと思う。新しい王となるボリングブルックとの関係においてリチャードの死がもたらすものは何か、という事に注目してみたいと思う。王の気まぐれにより、財産を没収され地位を失ったボリングブルックがクーデターを起こし、王権を手に入れる事には、復讐以外にも何か意味が隠されているのであろうか。

1 . 鏡を無視するリチャード

リチャードが矛盾をはらんだ存在であることは既に述べたが、この矛盾に対して意見する人間は確かに存在する。真実をありのままに映すちょうど鏡のような存在である。病に伏すゴント(Gaunt)を訪問した時の二人の会話をここで引用してみたいと思う。

Gaunt O no, thou diest, though I the sicker be.

Richard I am in health, I breathe, and see thee ill.

Gaunt Now he that made me knows I see thee ill:
Ill in myself to see, and in thee seeing ill.
Thy deathbed is no lesser than thy land
Wherein thou liest in reputation sick,
And thou, too careless patient as thou art,

Commit'st thy anointed body to the cure
Of those physicians that first wouDED thee.

(2.1.91-9)

ゴ ー ン ト いや、あなたが死ぬのだ。私は病人かもしれないが。

リチャード 私は健康だし、息もできるし、あなたが具合が悪いのも見ている。

ゴ ー ン ト 私を創った神も知っているが、私こそあなたが具合が悪いのを見ている。

私の眼は悪いが、あなたが具合が悪いのは見える。

あなたはご自分の王国を死の床のようにし、悪い評判に身をくるんで寝ているのだ。

あなたはなんと不注意な病人であることよ。

その体を治すように任命するような事をしているのだから。

最初にあなたを傷つけた者たちを医者にして。

ここでは見える見えないの対比があるのがわかるであろう。² ゴーントは病におかされていて視力が弱っているにもかかわらず、真実が見えているのである。反面、健康なリチャードは視力に何の問題もないにもかかわらず、実情が見えていないのである。ゴーントはリチャードにとって、鏡の役割をしているが、リチャードはその鏡を見ようとはしないのである。この構造は後に、リチャードがボリングブルックの財産、地位を不正に手に入れようとする際に、ヨーク(York)が忠告するにもかかわらず、意に介さない状況と似ているものである。この不正によって「あなたは千万の危険を頭上に招き / 千万の善意の民心を失うことになる」(“ You pluck a thousand dangers on your head, / You lose a thousand

well-disposed hearts ”)(2.1.205-6)というヨークの忠告は、「あなたがどう考えようと、手に入れるつもりなのだ / 彼の皿も品も金も領地も全てだ」 (“ Think what you will, we seize into our hands / His plate, his goods, his money and his lands ”)(2.1.209-10)という言葉によって否定されてしまうのである。後にリチャード自身に起こる災いを考える時、悪行を映す鏡の存在を無視していると考えられるであろう。ゴントの言葉、ヨークの言葉、共に真実を映す鏡であり、それをリチャードは見えていないのである。この二人の言葉は政治にかかわる人間としての言葉であり、ポラ・ブランク (Paula Blank) が述べる「『リチャード2世』の中で、自由に語るという特権はまた、王の前で正直に語る責任と結びついているのである」 (“ The privilege of speaking freely is also tied, in *Richard* , to the charge of speaking truly before the king ”)(336)事を裏付けるものである。責任を果たしたゴントとヨークであるが、その結果はリチャードによるその無視という結果を生むだけなのである。見えている家来に対して見えていないリチャードという構造がはっきりわかるのではないだろうか。

鏡とは正面を映すものであるが、同時に自分の背後を映すことも可能なものである。リチャードにとっての背後とは、つまり自分に従う家来であり、そして臣民である。背後にある人々の存在をリチャードは、鏡という存在を見ないことによって否定しているのである。ボリングブルックの反抗心に火をつけ、王位をとられることになるリチャードであるが、自分の家来の存在を軽視していることは、この鏡の存在の無視にも象徴的に表されているのである。

ゴントやヨークは鏡と同じような存在で真実を語る人物として描かれているが、リチャードは実際に鏡を作品の終盤で覗き込んでいる。³ボリングブルックの反乱によりリチャードは捕えられ、新しい王ボリングブルックと対峙することになる。その際にリチャードは鏡を要求するのである。その場面を引用してみたい

と思う。

Richard Give me that glass and therein will I read.
No deeper wrinkles yet? Hath sorrow struck
So many blows upon this face of mine
And made no deeper wounds? O flatt'ring glass,
Like to my followers in prosperity
Thou dost beguile me. Was this face the face
That every day under his household roof
Did keep ten thousand men? Was this the face
That like the sun did make beholders wink?
Is this the face which faced so many follies,
That was at last outfaced by Bolingbroke?

(4.1.276-86)

リチャード 鏡をくれ。そしてその中のものを読んでみよう。
まだ深い皺はないだろうか。悲しみが
あんなに何度も私の顔を打ちのめしたのに、
これより深い傷は与えられなかったのだろうか。
おべっかの鏡よ、
栄えた時の家来に似て、
私を欺くのだな。これがあの顔なのだろうか。
毎日ひとつ屋根の下で、
一万の人間を携えていた顔なのか。これがあの
顔なのか。
太陽のように見るものを皆眩しがらせていた顔
なのか。
これが愚かな事に顔を向けた顔なのか。
そしてついにボリングブルックに潰された顔な
のか。

この台詞の直後にリチャードは地面に鏡を叩きつけ、砕いてしまうのである。⁴この行為は鏡に映る自分の否定であり、現実の拒否であると言えるであろう。リチャードの述べる「これらの外にあらわれた悲しみ」(“these external manners of laments”)(4.1.296)以上の破壊を行っているリチャードである。それは鏡に映した自分の存在にのみならず、臣民に責任を持つ王の威厳をも破壊したのである。反乱によって敗者となったリチャードは事実を正確に映す鏡の破壊によって、嘆くだけであり自身への反省という現実の直視を行っていないのである。

この後にロンドン塔へ移動させられたリチャードは独りで以下のような台詞を吐く。リズムが狂うと美しい音楽が台無しになり、弦の調子が外れるのを聞き取れるほど良い耳を持つにも関わらず「国家と時間という一致には/正しい調子を聞き分けることは出来なかった/私は時間を無駄にして、そして今時間が私を無駄にしている」(“But for the concord of my state and time/Had not an ear to hear my true time broke./I wasted time and now doth time waste me”)(5.5.47-9)と語るのである。内省を行っているように思えるが、ここで際立っているのは、政治を音楽、そして自分の聴覚の観点から述べているリチャードなのである。⁵つまり感覚と政治を結び付けているのである。序盤にモーブレーとボリングブルックによる争い事の解決を決闘によるものとするとしながらも、突然やめさせボリングブルックの刑罰を10年の追放から6年に縮めるという決定をしたリチャードの命令も、彼自身の感覚によるものなのである。恣意的な命令を行ったりリチャードと終盤での感覚と自身の政治への考えを結び付けたリチャードには差がないのではないだろうか。王権を失った後にも自身の行った政治への内省は感覚を重視しているのである。

ゴントの忠告、ヨークの忠告という真実を映す鏡の役割の否定、そして実際の鏡を割るという反省を伴わない現実の否定を行

ったリチャード

は、最後まで感覚重視の考えを捨てきれないのである。鏡に映る自分の否定は、自身の変化の否定でもあるのである。なぜならば、鏡は割れてしまえば、もう現実を正確に映すことは出来なくなってしまうからである。

2 . ボリングブルックの正当性と二面性

リチャードによって不当に地位と財産を奪われたボリングブルックに読者は自然と共感を覚えるに違いない。ボリングブルックは、序盤のモーブレーとの決闘の中止の後に、リチャードから刑罰を与えられるが「この地において陛下を温める太陽が私にも輝いて /そしてここで陛下を金色に染める光が /私に届き追放を金色にしてくれますように」(“ That sun that warms you here shall shine on me / And those his golden beams to you here lent / Shall point on me and gild my banishment ”)(1.3.145-7)というように、自分が不利な状況になっても国王への敬意を失っていないのである。国王と太陽の金色は尊厳の喩えであり、追放の身でありながらも国王の尊厳に敬意を抱くという喩えである。そもそも決闘に至る過程でボリングブルックが望んだ事は「正義」(“ justice ”)(1.1.106)であり、正義を得られない場合には「この命を捨てる」(“ this life be spent ”)(1.1.108)という強い思いなのである。リチャードにより10年の追放の刑罰を6年に縮められた時も、喜ぶより先にリチャードの気まぐれを快く思わないボリングブルックなのである。ボリングブルックの正義感を感じることができないだろうか。

シェイクスピア劇全般について良心の問題を取り上げているセオドア・マーロン(Theodor Meron)は「宗教的、精神的次元を強調し、シェイクスピアは、規範の順守を確立するための特に強力な武器として良心を利用している」(“ Emphasizing the religious-

spiritual dimension, Shakespeare uses conscience as a particularly powerful weapon for ensuring compliance with norms ”)(40)と述べているが、この事はボリングブルックの性格を説明し、王権獲得の正当性を裏付けるものと言えないだろうか。正義感という良心がボリングブルックの正当性に根拠を与えているのである。

リチャードと戦うことになったボリングブルックは敵となったリチャードにさえも、前王としての敬意を失っていないのである。それがわかる場面をここで引用してみたいと思う。まもなく死罪により魂が肉体から離れていくブッシ (Bushy) とグリーン (Green) をあまりにも責め立てるのは慈悲に反するとしながら、次のような処罰の理由を述べるボリングブルックである。

Bolingbroke You have misled a prince, a royal king,
A happy gentleman in blood and lineaments,
By you unhappied and disfigured clean.
You have in manner with your sinful hours
Made a divorce betwixt his queen and him,
Broke the possession of a royal bed
And stained the beauty of a fair queen's
cheeks
With tears drawn from her eyes by your foul
wrongs.

(3.1.8-15)

ボリングブルック お前たちは主君である王に道を誤らせ、
血統、風采において幸福な紳士を
不幸にし、醜い姿へと追いやった。
お前たちは罪深いお前たちの時間を以て、
王と王妃の仲を裂き、

王の床を、当然持つ婚姻の権利を壊した。

そして美しい王妃の頬を汚したのだ。

お前たちの悪行によって流さねばならない王妃の涙によってだ。

リチャードという敵になっただけながらも王位にあった人間に対しての敬意が十分にわかるのではないだろうか。この王に対しての悪に続いて、ボリングブルックは自分に対して起こった損害をブッシとグリーンに述べ、死の宣告を行っているのである。自分の損害よりも王への悪行を第一に考えるボリングブルックである。ボリングブルックの正当性を読者が自然と感じるのは無理もないことではないだろうか。ボリングブルックは、良心という道理をわきまえた人物として描かれているのである。

リチャードとボリングブルックを中心に劇が進行するのは当然の事である。この劇は王位の交代が中心となるテーマだからである。それでは、リチャードとボリングブルックを同時に考慮に入れたとき、何か発見があるだろうか。ジェフェリー・S・ドーティー (Jeffrey S. Doty) は二人の関係について「シェイクスピアはボリングブルックの権力への昇進を劇にしながら、同時にリチャードあるいはボリングブルックへの判断を保留にしている。劇の中でバランスが主なイメージなのは偶然ではないのである」

("Shakespeare dramatizes Bolingbroke's ascent to power while simultaneously suspending judgement on either Richard or Bolingbroke. It is no coincidence that the balance is a chief image in the play") (192) と述べているが、この事を発展させたなら二人のバランスにはある種の共通点が見いだせないだろうか。

リチャードは王として神に仕える身というのを意識している。エリザベス朝時代の思想である王権神授説を理解しているのである。自分の立場と神の存在を並べた彼の台詞をここで引用してみたいと思う。

Richard Strives Bolingbroke to be as great as we?
Greater he shall not be: if he serve God,
We'll serve him too and be his fellow so.
Revolt our subjects? That we cannot mend;
They break their faith to God as well as us.
Cry woe, destruction, ruin and decay
The worst is death, and death will have his day.
(3.2.97-103)

リチャード ボリングブルックが私と同じように偉大になろうとしているのか。
私以上には偉大にはなれない。彼が神に仕えるのなら、
私も彼に仕え、彼もまた対等である。
臣下が背いたのか。それは仕方がない。
しかし私に背くことは神への誓約を破るものなのだ。
悲哀、破壊、滅亡、衰え。
最悪は死だが、死は誰でも避けられないのだ。

王とは神権により与えられた地位であり、神の概念が持ち出されるのならば、正しさを絶対の条件とするものなのである。神をたてた行為ならば、そこには不正があってはならないのである。

しかし、実際にリチャードはゴーンの死後、息子であるボリングブルックに当然残される遺産をことごとく差し押さえ、売却するという不正を行っているのである。そしてボリングブルックの相続財産引き渡しの訴えを拒否してしまうのである。王の行為が神の正しさをまとっているならば、これはその法を逸脱した行為であり、規則の無視なのである。

そしてリチャードとのバランスを考えた時に出てくるボリングブルックの共通点は何かと言えば、やはり規則に従わない彼の行動である。ボリングブルックは6年の追放の刑罰を受けながらも、その時間が経つ前にリチャードに対して軍事行動を起こしているのである。王権神授説を考えるならば、王への謀反は、神権への侵害であり、規則の無視なのである。ボリングブルックには正義感という良心がある、という事は既に述べたが、規則を破るという逸脱を行っているのも事実なのである。敵となったりリチャードに対してさえも敬意を示すボリングブルックであるが、それは追放の罰と王権神授説を無視した上に成り立っている敬意なのである。

リチャードの存命中には、ボリングブルックは敬意と神権の無視という矛盾を抱える事になるのである。リチャードとボリングブルックは規則の無視という共通点を持つ。⁶ボリングブルックの敬意という正当性、そして刑に対しての無視と王権という神権の無視という不当性は、彼の置かれた立場の二面性を説明する言葉と言えらるであろう。相反する立場にありながらも、リチャードとボリングブルックは共通点を持つ存在なのである。

結論

リチャードとボリングブルックの二人に注目し、第一節では真実を映す鏡の存在を無視するリチャードを説明した。彼は反省を伴わず現実を拒否する登場人物であるという事を示した。第二節ではボリングブルックには正義感という良心があるにもかかわらず、リチャードと共に規則の無視という共通点を持ち、リチャードの存命中には正当性と不当性の二面性を生きることになる、という事を示した。この論文の論題は、リチャードが殺される意味は何であるかという事である。ボリングブルックが王になることにはどんな妥当性があるのだろうか。

リチャードによるボリングブルックの追放を富める者を貧しくする事として経済的な意味でも彼にとって損失であると述べるデニス・R・クリンク(Dennis R. Klinck)は「ボリングブルックは明らかに『悪人』でもなければ、『自由である正当な土地所有者』でもない。だがリチャードによる彼の追放と貧困化は王の別の意味での『浪費』という次元を示しているかもしれない」

(“ Bolingbroke is obviously not a “ villaine ” or a “ tenant at will, ” but his exile and impoverishment by Richard may suggest another dimension of king’s “ wastefulness ” ”)(200)と述べているように、リチャードの王としての不適格さは示されているところである。またリチャードはボリングブルックとの戦いにおいて「弱い人間は敗れなければならない。なぜなら天は常に正義に味方するのだから」(“ Weak men must fall, for heaven still guards the right ”)(3.2.62)というように神について度々言及を行い、自分の正当性を表現している。しかし、神頼みという考え方は、リチャードの弱い一面を表しているとも考えられるのである。ボリングブルックとの戦いに敗れた後のリチャードの長い台詞には、敗北感に満たされた弱い人間像が十分に表れているのである。敗軍の将として堂々とふるまう感じではないのではないだろうか。神への言及の滑稽さは、デイビッド・M・バージェロン(David M. Bergeron)が「きまって神と天使の超自然的な世界を取り上げて、自分を救ってくれるとしているが、リチャードは王のパロディ、偽の王となる危険を冒している」(“ Regularly invoking a supernatural world of God and angels readying themselves to rescue him, Richard risks becoming a parody of a king, a mock king ”)(37)と述べている事であり、この意味でもリチャードの不適格さは説明できることである。

それではリチャードからボリングブルックに王位が移ることで何か変わるだろうか。それはリチャードが死ぬことによって、ボリングブルックの正義感が王権として相応しいものとなるのであ

る。リチャードが存命中のままでは、規則を破ったボリングブルックの不当性は消えず、正義の正当性と共に二面性を生きることになるのである。リチャードが死ぬことにより、二面性は解消され、王権の正しさが強調される事になるのである。リチャードに受けた被害に対しての復讐の意味を超えて、ボリングブルックは王となる事により、正しさを王権に持ち込むことができるのである。リチャードが道理に合わず言及した王権神授説は、ボリングブルックが王につき、政治を行うことで妥当性を持つことになるのである。ボリングブルック自身もリチャードの死に対して、聖地遠征の十字軍に参加し、自分の手から血を洗い清めようという意思を示しており、死者への哀悼という神性に言及している。これはリチャードの神への言及の滑稽さとは違い、現実のリチャードの死に対しての反応である。現実味のないリチャードによる神への言及とは差がみられるのではないだろうか。本稿の論題であるリチャードの死の意味。それはボリングブルックの復讐の意味を超えた王権と正義を結び付ける正当性の確立である。これが本稿の出した答えである。

国のトップの判断により国民が幸せにもなるし、不幸にもなる。コロナ騒動のさなかで政治が国民の生活にはっきりとした影響を及ぼしたのは日本人全員が感じたことである。王権神授説とは遠い過去の思想であるが、国民を率いるトップに対して、その地位にふさわしい人格が期待されるのは当然の事である。神を持ち出すのは政教分離の考えに反することで相応しいことではないが、神性に近い考え方で、良心を強調するのは悪いことではないであろう。ノブレス・オブリージュにも敷衍できる遠い過去だが、現代にも意味を投げかける王権神授説という考え方ではないだろうか。

註

- 1 . 以下、『リチャード二世』からの引用は William Shakespeare, *Richard* , Oxford University Press, Oxford World's Classics シリーズの 2011 年の版に拠る。
- 2 . この二項対立の要素は、リチャードとボリングブルックの対比、あるいはシェイクスピア劇を説明するうえで重要な appearance と reality にも広げて考えることができる。
- 3 . 生きているかどうかわからない人間に、息があるのを確かめるために口元へ鏡を持っていく事があるが、精神的に瀕死のリチャードにとって、鏡は自分の精神的生命の確認に他ならないと考えられる。
- 4 . 民間伝承では鏡を割ることは 7 年間の不幸をもたらすとされる。この鏡を割る行為は、リチャード自身の不幸とも重なる行為である。
- 5 . 音楽とは、当然曲の終わりがあるもので刹那的である。リチャードの治世の限られた時間とも重ね合わせられる。横暴を続けてきたリチャードの短い治世と音楽の刹那性は合わせて考えられる。
- 6 . 落ちていくリチャードと昇っていくボリングブルックは、人間の弱さと強さの二面性とも考えられる。同じ俳優が二人を演じるような演出も時にはなされているし、二人の共通点を論じる事は重要であると思われる。実際の演劇の鑑賞が、紙の戯曲の解釈の手助けになるのは言うまでもないことである。

引用・参考文献

- Bergeron, David M. . “ “*Richard II*” and Carnival Politics. ”
Shakespeare Quarterly, Vol. 42, No. 1 (Spring, 1991),
<https://www.jstor.org/stable/2870651>, pp. 33-43.
- Blank, Paula. “ Speaking Freely about *Richard II*. ” *The Journal of English and Germanic Philology*, Vol. 96, No. 3 (Jul., 1997), <https://www.jstor.org/stable/27711525>, pp.327-48.
- Budra, Paul. “ Writing the Tragic Self: *Richard II*'s" Sad Stories.”
Renaissance and Reformation / Renaissance et Réforme, New Series / Nouvelle Série, Vol. 18, No. 4 (FALL /AUTOMNE1994), <https://www.jstor.org/stable/43465088>, pp. 5-15.
- Doty, Jeffrey S. . “ Shakespeare's *Richard II* , "Popularity," and the Early Modern Public Sphere. ” *Shakespeare Quarterly*, Vol.61,No.2(Summer2010),
<https://www.jstor.org/stable/40731>, 155pp. 183-205.
- Estill, Laura. “ *Richard II* and the Book of Life. ” *Studies in English Literature, 1500-1900*, Vol. 51, No. 2, Tudor and Stuart Drama (SPRING2011),<https://www.jstor.org/stable/23028076>, pp. 283-303.
- Halverson, John. “ The Lamentable Comedy of *Richard II*. ”
English Literary Renaissance, Vol. 24, No. 2, Studies in Shakespeare (SPRING1994),<https://www.jstor.org/stable/43447435>, pp. 343-69.
- Irish, Bradley J. . “ The Prehistory of *Richard II* and Shakespeare's Dramatic Method. ” *Renaissance Drama*, Vol.41,No.1/2(Fall2013),
<https://www.jstor.org/stable/10.1086/673905>, pp. 131-49.
- Kehler, Dorothea. “ King of Tears: Mortality in "*Richard II*". ”

Rocky Mountain Review of Language and Literature, Vol. 39, No. 1 (1985), <https://www.jstor.org/stable/1346758>, pp. 7-18.

Klinck, Dennis. "Shakespeare's *Richard II* as Landlord and Wasting Tenant." *Counterpoints*, Vol. 121, UNDISCIPLINING LITERATURE: LITERATURE, LAW & CULTURE (1999), <https://www.jstor.org/stable/42975484>, pp. 190-205.

Lamb, Jonathan P. "The Stylistic Self in "*Richard II*". " *Medieval & Renaissance Drama in England*, Vol. 28 (2015), <https://www.jstor.org/stable/44505193>, pp. 123-51.

Menon, Madhavi. " "*Richard II*" and the Taint of Metonymy. " *ELH*, Vol. 70, No. 3 (Fall, 2003), <https://www.jstor.org/stable/30029894>, pp. 653-75.

Meron, Theodor. "Crimes and Accountability in Shakespeare." *The American Journal of International Law*, Vol. 92, No. 1 (Jan., 1998), <https://www.jstor.org/stable/2998059>, pp. 1-40.

Parvini, Neema. "Ideology in *Richard II* and *Henry IV*." *Shakespeare's History Plays: Rethinking Historicism*, Edinburgh University Press. (2012), <https://www.jstor.org/stable/10.3366/j.ctt1wf4c98.12>.

Shakespeare, William. *Richard II*. Ed. Anthony B. Dawson and Paul Yachnin, Oxford University Press, 2011.